

## スウィフトの自叙伝について

三 浦 謙

スウィフトに関する伝記資料の中で、伝記作者が一様に重視するのは、スウィフト自身が1728年頃書いた未完の自叙伝<sup>(1)</sup>である。この自叙伝は、スウィフト家の祖先の記述から1699年までの期間に限っているので未完で終わっているが、執筆の当初は大いに期する所があったのかもしれない。「スウィフト家はヨーク州（イングランド北東部：同国最大の州）の由緒ある家柄である」<sup>(2)</sup> という重々しい口上で始まっている。

ところでスウィフトの両親に到るまでの祖先の記述は、全体の略半ばを占めているが、スウィフトは祖先の記述をそれほど遡って始めている訳ではない。祖先といっても、具体的な記述は、1627年、チャールズ一世によってアイルランドの貴族に加えられ、カーリングフォード子爵 (Viscount of Carlingford) の称号を賜ったカバリエロ・スウィフト (Cavaliero Swift) に始まる。ウィットとユーモアに富んだといわれるこのカバリエロ・スウィフトは、貴族にはなってもアイルランドに居住することは一度もなかった。

スウィフトが祖先を語るに当って、最も力点を注いでいるのは祖父のトーマス・スウィフト (Thomas Swift) である。彼はヘリフォード州 (Herefordshire) (イングランド南西部) のロス (Ross) から1, 2マイルのグッドリッチ (Goodrich) の牧師だった。変った男で、彼はまず家紋を変えた。錨に海豚を巻きつけた構図を考案して、それに *Festina lente* (= *Make haste slowly*) という標語を添えた。次に、1636年、グッドリッチの地所に風変りな家を建てた。今日では廃屋同然になっているが、その設計は異様である。ワイ河畔の静かな溪谷を見下ろす小高い丘に立っていて、三つの家屋が中央部でつながっている。縦仕切りの窓が広い田園に向って

開かれ、家はガッシリしていて安定感があり、どこを見てもスペースに無駄がなかった。中でも際立っているのは、隠れ場所となる大きな地下室である。揚げ蓋をあげて通路づたいに入る地下室は、危急のさいには、人間、食糧はおろか家畜まで入れるスペースがあった。

このトーマス・スウィフトは、なかなか勇猛果敢で、チャールズ一世への忠誠心が厚かった。ある時、三百騎の反乱軍が王党軍を襲撃する意図を知ると、機械操作に強いトーマス・スウィフトは、一計を案じて、鉄片にそれぞれ3個の犬クギをつけ、その中の1本の尖端をそれぞれ上向きにしておいた。某月某日の早朝、反乱軍が渡河作戦を実施する旨の報せを受けると、あらかじめ夜のうちに、浅瀬に鉄片をバラ撒いておく。反乱軍は、予定通り渡河したので、馬から落ちて溺れ死んだり、馬に踏み殺されたり、犬クギに引き裂かれたりして、反乱軍の中、二百名が命を落した。彼はまた土地を抵当にして得た三百枚の金貨をチョッキに縫いこんで、王党軍の司令官の元に届けたりした。彼のこのような忠誠ぶりは、議会党軍の反感を大いに買うことになった。そのため、彼は50回以上もの掠奪にあい、書籍と家財道具のすべてを奪われた上に、家族が着ている衣服さえも剥ぎとられた。

1646年、チャールズ一世に忠誠を盡したという理由で、彼はチャールズ一世派のどの牧師よりも早く聖職祿を剥奪された上に、土地を没収された。そしてヘリフォードの革命委員会は、彼をラグランド城 (Ragland Castle) の監視の厳しい獄舎に長い間監禁した。

トーマス・スウィフトは、1658年5月2日、チャールズ二世による王政復古を待たずに63歳で他界した。チャールズ二世は、一部の高位聖職者の推薦により、神意に適って王政復古が成った場合には、昇格もしくはその他の方法で、彼の功績に酬いることを約束していたが、結局、この約束が果されることはなかった。

ところで、トーマス・スウィフトは、息子が10人、娘が3人乃至4人という子沢山だった。長男のゴドウィン・スウィフト (Godwin Swift) は弁護士でかなりの資産を残した。2番目の父親と同名のトーマス・スウィフ

トはオックスフォードで教育を受け、僧職に就いた。その他の息子ドライデン (Dryden), ウィリアム (William), ジョナサン (Jonathan), アダム (Adam) は皆アイルランドで暮し、アイルランドで死んだ。7 番目か 8 番目のジョナサンには、姉娘のジェーンの外に父親の死後 7 ヶ月で生れた父親と同名の息子があった。これが聖パトリック教会の主任司祭になるジョナサン・スウィフトである。彼の父ジョナサンは、ダブリンの法律家協会の執事だった。母はレスター州 (Leicestershire) (イングランド中部) の由緒ある家柄といわれるエリック家 (the Ericks) の娘アビゲイル・エリック (Abigail Erick) である。エリック家の祖先には、ウィリアム征服王の侵寇のさい、軍を起してこれと戦ったが、結局敗北した気骨ある将軍がいる。彼は老境に入ってからレスター州に隠退し、その地で余生を送った。エリック家はその後、代々、レスター州に住みつくが、代が変わるごとに家運が衰え、アビゲイルの代には、一介の郷土の身の上だった。

この兩人の結婚は、スウィフトにいわせるとたいへん慎重を缺いていた。妻はほとんど財産を持込むことがなかったし、一家の生活が安定するまえに父親が急死したからである。スウィフトは教育面ばかりでなく、その生涯にわたって不利益を蒙ったと歎いている。

ここで、『ガリバー旅行記』の生みの親ジョナサン・スウィフトが登場することになるが、この自叙伝には、奇妙な点がいくつかある。まず第一は、自叙伝といいながら他人事のように三人称で書いていることである。両親の慎重を缺いた結婚に言及した後で、「彼は聖アンドリュウ祭の日にダブリンで生れた」<sup>(3)</sup> と続く。二箇所だけ一人称を使っているところがあるが、そこでは自叙伝の書き手と自叙伝の主人公を別の人間に仕立て上げている。次のような案配である。

「私の記憶では、トーマス・スウィフトの息子には、他にトライデン・スウィフト（詩人であるドライデンと近い姻戚関係にあった母親の名に因んでつけられた）、ウィリアム、ジョナサン、アダムがいる。彼らは皆アイルランドで暮らし、アイルランドで死んだ。だが、ジョナ

サン以外には男の嫡子がなかった。彼には、娘の外に父親の死後 7 ケ月で生まれた息子があった。私は、その息子の生涯のいくつかの覚え書を認めたいと思う」<sup>(4)</sup>

なぜ、自身のことを三人称で書くのか。自叙伝の記述を客観的な事実のように見せかけるためか。だとすると、スウィフトの意図はかなり報われたことになる。後代の伝記作者の多くは、自叙伝の記述を無批判に受け入れているからである。

ところが、自叙伝の記述内容には疑問点がいくつかある。スウィフトは、意識的か無意識的かわからないが、数字には杜撰なのだ。In Search of Swift の著者デニス・ジョンストン (Denis Johnston) は、この点を執拗に追求している。いくつか例を挙げよう。

まず、祖父のトーマスには、息子が 10 人、娘が 3, 4 人あったとっているが、これはゴドウィンおじの葬儀関係書類の記載事項と矛盾している。1698 年 4 月 20 日付でウィリアムおじが署名しているこの書類は、今日、アイルランド政庁 (Dublin Castle) の系図係りの手元に保管されているが、これには、息子が 6 人、娘が 4 人となっているという。また、この書類によって、トーマスおじは、「2 番目」ではなくて 3 番目、スウィフトの父親は、「7 番目か 8 番目」の息子ではなくて、5 番目であったことがわかるそうだ。

次に、スウィフトは、おじの中では、ゴドウィンおじ以外には嫡子がなかったとっているが、実際はウィリアムおじにも、アダムおじにも息子があった。しかも、アダムおじには、スウィフトが自叙伝執筆中に存命の息子がいたのである。彼は 1758 年 7 月 12 日に他界して、聖ブライド (St. Bride) 寺院に葬られたという。

第 3 は、アイルランドに戻る前に、ウィリアム・テンプル家に「約 2 年間」滞在したとっている点である。実際は 1 年足らずだった。それにスウィフトが 1689 年の春初めてウィリアム・テンプル家に厄介になった時、テンプルはリッチモンド (Richmond) に近いシェーン (Sheen) にではなく、

サリー (Surrey) 州のファーンハム (Farn-ham) から程遠くないムア・パーク (Moor Park) にいたと述べているが、これも事実と符合しない。テムプルは1686年11月から1688年の名誉革命までの期間および1689年の末以降はお気に入りのムア・パークに住んでいたが、1680年に公職を退いてから、サリー州の広大な牧草地を購入して、豪勢な居宅を構え、1686年11月にムア・パークに移り住むまでの間と、名誉革命が勃発してから、侵攻軍に加担して不運にも命を絶った愛息の跡始末が終る1689年の末まではシーンに居住していたのである。

第4はスウィフトの生年月日についての疑問で、これは意図的ではないかと指弾されても致し方ない。自叙伝では11月30日の St. Andrew's Day<sup>(5)</sup> に生まれたと述べているだけで、なん年の St. Andrew's Day かわからない。Alumni Dublinenses という標題で、トリニティ・カレッジの大学出版局から出ている同窓会名簿に、スウィフトが1682年4月24日 "aetat 14" (= at the age of 14) で入学したという記載があるので、逆算すると、1667年の St. Andrew's Day であることが判るのである。ところが、この同窓会名簿のスウィフトが自署している個所の末節に、1700年2月に30歳とスウィフトは書いてあるそうである。とすると、スウィフト誕生の年は1669年になる。

また、自叙伝の初めの方で、スウィフトは21歳の時に、3年議会法<sup>(6)</sup>の件で、ウィリアム三世に助言したと述べている。これが事実だとすると、この法案が論議的になったのは、1693年なので、スウィフトは1672年に生まれたことになる。

結局、スウィフトが生まれたのは、1667年なのか1669年なのか1672年なのか、彼自身が混乱させていることになる。ただ、1672年だとすると、実際は9歳なのに14歳と偽ってトリニティ・カレッジに入ったことになる。だが、これは、とてもありえないことなので、1672年説は根拠が薄いとジョンストンは述べている。

さて、スウィフトが1歳の時、彼の身に思いがけない事件が起きた。ホワイトヘイヴン (Whitehaven) (イングランド北西部のカムバランド

(Cumberland) 州にある) からきていたスウィフトの乳母が重病の親戚を見舞うという理由で、母親に内緒で、スウィフトを船に乗せ、ホワイトヘイヴンに連れ去ってしまったのである。事の顛末を知った母親は、二度とかかる無茶は慎しむように命じて、スウィフトをそのままホワイトヘイヴンに置いておくことにした。結局、スウィフトは3年、乳母の元に滞在することになった。その間、乳母がスウィフトを可愛がり、よく面倒をみたので、スウィフトが3年後、母の元に帰る頃には、聖書のどこを開いても読めるようになっていたとスウィフト自身述べている。乳母の名は、今日伝わっていないが、ピルキントン (Pilkington) 夫人もシェリダン (Sheridan) も、アイルランドの女であったと述べている。シェリダンによると、アイルランド生まれの乳母は、子供が好きになると、片時も離せなくなるのが通例だという。

ところで、スウィフトが聖書のどこも読めるようになった年齢というのも当てにならない。当時、キルデア (Kildare) の司教で、クライスト・チャーチ・カシードラル (Christ Church Cathedral) の主任司祭でもあったチャールズ・コップ (Charles Cobbe) が1738年頃、スウィフトの許可を得て写した自叙伝の写本では、この年齢は2歳になっている。スウィフトはその後、これを「ほぼ3歳」(almost three) に変え、さらに almost を抹消した。伝記作者もこの点は信用が置けない。ホークスワース (Hawkesworth) は5歳にしているし、ライアン (Lyon) は中庸をとって4歳にしている。

さて、アイルランドに戻ったスウィフトは、ゴドウィンおじの元に預けられ、6歳から14歳まで、アイルランドのイートンといわれたキルクニー・カレッジ (Kilkenny College) に通う。キルクニーではコングリーヴ (Congreve) がスウィフトの2年後輩だった。そして、14歳でダブリンのトリニティ・カレッジに自費生 (pensioner) として入学する。ゴドウィンおじは、富裕とはいえ子沢山で、14人の息子と3人の娘があり、この中、3人の息子しかトリニティ・カレッジに進ませていないので、トリニティ・カレッジへの進学についてはスウィフトはゴドウィンおじに大いに感謝

しなければならないところだが、実情は感謝するどころか激しく嫌悪している。スウィフトは、自叙伝の中で次のように告白している。

「ごく近い親戚のひどい仕打ちにあって、すっかりヤル気をなくしたので、学業はたいへん疎かになった。2, 3の課目は、生まれつきあまり興味がもてず、歴史と詩を読むのに専念した<sup>(7)</sup>」

ごく近い親戚というのはゴドウィンおじである。ダブリンの大執事 (Archdeacon) のホイッテンガム師 (the Rev. Whittingham) との会食の席で、スウィフトはゴドウィンおじから犬なみの教育をうけたと述べている。これを聞いたホイッテンガムは怒って、「あなたには犬なみの感謝の気持もないのか」と応酬している。そして奇妙なことに、スウィフトは、余り恩恵を蒙っていないと思われるウィリアムおじに素直に謝意を表明しているのである。

次に、ゴドウィンおじの咎にしているトリニティ・カレッジでの学業成績の不振だが、スウィフトは、決してこれを隠そうとはしていない。学業不成績の結果、スウィフトは、「整然と規則を守って学生生活を送ったのだが、怠惰と勉学不十分の理由で、学士号を差し止められた」<sup>(8)</sup> のである。だが、この前半の記述にかんしては、トリニティ・カレッジの当時の副学長ジャッキー・バレット (Jacky Barrett) のスウィフトについての報告と喰違いがみられる。バレットは、スウィフトの大学生活には、「70週を上回る規則違反と2年未満の罰則」がみられるといている。罪状としては、チャペルの義務を怠ったこと、市街を徘徊して夕刻の点呼を受けなかったこと、それに、いかにもありそうなことだが、悪罵雑言の文書である。その結果、学内の定額食 (commons) を差し止められ、学寮の大食堂で、ジュニア・ディーン (Junior Dean) のオウエン・ロイド (Dr. Owen Lloyd) の面前で膝まずいて屈辱的な謝罪を強いられた。スウィフトが特別の恩典 (Speciali gratiae) で B. A. を取得したのも不思議ではない。この不名誉な記録は今日まで残っているが、スウィフトは、この不面目を恥じ入っての

ためか、最後まで母校にたいして屈辱感を拭い去ることはなかった。1692年ウィリアム・テムプルの計らいで、オックスフォードのハートホール(Harthall)(今日のハートフォード学寮(Hartford College))に入り M. A. の学位を取得するが、このオックスフォードでの生活と較べても、トリニティ・カレッジでの毎日は重苦しかったようである。ウィリアムおじへの書簡<sup>(9)</sup>で、スウィフトは次のような感想を洩らしている。

恥ずかしい話ですが、ダブリン大学での7年間よりも、オックスフォードで赤の他人に世話になった数週間のほうが、私には余程ありがたかった。<sup>(10)</sup>

ところで、スウィフトの学業不成績は、論理学を主眼とする当時のカリキュラムにも問題があった。スウィフトは気質的に、アリストテレス以来の伝統的な形式論理学を受けつけることができなかった。どんなチューターもスウィフトにこの方面の著作をいずれも3ページ読ませることはできなかったといわれている。

スウィフトには、論理学以外にも2, 3興味を示せない科目があった。ディーン・スウィフト(Deane Swift)<sup>(11)</sup>には、物理学、形而上学、自然哲学、数学が苦手と理解できなかったと付け加えている。

後、トリニティ・カレッジの学長になった同時代人のボールドウィン博士(Dr. Baldwin)は、スウィフトがトリニティ・カレッジで際立っていたのは、騒ぎを起すくらいのことだったと述べている。学業は芳しくなかったのだ。

さて、1688年の後半から1689年の初頭にかけては、イギリス史上大きな動乱の時期である。1688年11月5日、オレンジ公ウィリアムはデヴォン(Devon)に上陸し、緩慢な速度でロンドンに向った。ほぼ時を同じくして、アイルランドから多くのプロテスタントが洪水のようにイングランドに移住した。ウィリアム・スウィフトも、アダム・スウィフトも、それぞれ、困窮した家族を抱えて、一時、イングランドに移った。だが、当時、



昏睡状態に陥っていたゴドウィンおじは、ダブリンに取り残されて、1695年12月7日、当地で他界した。彼の遺骸は、2日後、聖ウエルバーグ (St. Werburgh) 寺院に埋葬された。

ところで、オレンジ公ウィリアムが、1688年12月18日夜ロンドンに入ると、その4日後、ジェームズ二世はロチェスター (Rochester; Kent 州) からフランスへ逃げるよう勧告をうけた。トリニティ・カレッジの理事会は、アイルランドで騒擾が起きるのは必至とみたので、1689年2月13日、安全のために大学を徹去することを妥当と考える者は、その旨行動してほしいという裁定を下した。スウィフトがいつアイルランドを脱出したかは明確でない。バレット博士は、スウィフトは従兄弟のトーマスと1689年1月26日にアイルランドを離れてレスター居住の母の元に向ったとみている。しばらく母の元に滞在してから、スウィフトは母に書いてもらった紹介状を携えて、既述の通り、シーンに仮寓していたテンプルを訪ねた。

スウィフトを迎えたテンプルの反応ぶりにふれる前に、ここに一つの挿話がある。

それは、母の元に滞在中のスウィフトにまつわる艶話である。スウィフトと同じ聖パトリック寺院の教区牧師であったジョン・ウオロール師 (the Rev. John Worrall) 宛の手紙<sup>(12)</sup>によると、レスター滞在中、スウィフトは豆痕のあるベティー・ジョーンズ (Betty Jones) という宿屋の娘と昵懇の仲になった。スウィフトの母親は反対だったらしい。スウィフトがロンドンに出向いていた間に、ベティはロウボロウ (Loughborow) の宿屋の主人と結婚した。子供が何人かできたが、アンという女の子の外は皆夭折した。1728 / 9年に書かれたこの手紙の中で、スウィフトはウオロール師に、このアンが牧師館にきたら、5ポンドの金子を与えるよう指示している。スウィフトとステラとの間に子供ができていたという話をまことしやかに伝えたスウィフトの従僕ブレナンがこの話を知っていたら、本人の告白もあってステラとの1件よりも余程信憑性があるだけに、早速とびついてスキャンダルの種にしたことだろう。

さて、ウィリアム・テンプルの居宅を訪れたスウィフトは、出立に当っ

て、母のアビゲイルから、大要次のようなことをいわれていた。

サー・ウィリアム・テンプルは偉い人です。おまえの将来を考えてくださって教会関係か政府関係の就職を骨折ってくださると思う。あの方の奥さんは私たちの親戚だし、あの方のお父さんのジョン・テンプルは、おまえのお父さんやおじさんたちと昵懇だったんだから。

スウィフト自身、自叙伝の中で、ウィリアム・テンプル宅に赴いた理由として、「テンプルの父はスウィフト家と大の仲好しであった」<sup>(13)</sup> 点を挙げている。

だが、こうした繋りもあって、若いスウィフトを受入れたものの、テンプルは長くスウィフトを手元に留めておく気はなかった。なるべく早くアイルランドに返したかったが、当時のアイルランドはジャコバイト (Jacobites)<sup>(14)</sup> の勢力下にあったので、テンプルは、やむなく、友人で新王の下で国務大臣を務めるロバート・サウスウエル (Robert Southwell) に就職の斡旋を依頼した。スウィフトはテンプルに書いてもらった推薦状を携えてサウスウエルに会いに行くが、その推薦状には、スウィフトにはラテン語、ギリシャ語、フランス語の心得があり、正直者だから、サウスウエルの元で書記でもやらせるか、さもなくば、トリニティ・カレッジのフェローにでも推薦してもらえないかといった旨のことが書いてあった。だが、サウスウエルは、スウィフトを自分の手元に置こうともせず、トリニティ・カレッジのフェローシップをスウィフトにとらせようとしなかった。

自叙伝では、この事実をとりあげていない。「20歳前に、果物の飽食で、腹を冷やし、目まいがするようになって、危うく死にかけた。2、3年置きに死ぬまで続いたこの軀の不調を回復するために…医者勧めでアイルランドに戻ったが、却って悪化したので、間もなくして、サー・ウィリアム・テンプルの元に戻った」<sup>(15)</sup> ことになっている。果物というのはゴール

デン・ピピン (golden pippin) (リンゴの一種) である。自叙伝をまだ執筆していない 1727 年 8 月のハワード夫人 (Mrs. Howard) への手紙の中で、スウィフトはリッチモンドで一度にゴールデン・ピピンを百個食べて目まいがするようになったと述べている。

こうして、1691 年の夏には、再びスウィフトはテンプル家に落着くことになる。この時のスウィフトの処遇については、矛盾した二つの見解がある。一つは、このさい、すでにスウィフトの学才が高く評価されていたという甥のディーン・スウィフトの見方であり、もう一つは食事つき年 20 ポンドの書生で、もっぱらテンプルの口述筆記などを仕事とし、食事のさいはテンプルとの同席は許されなかったとするサミュエル・リチャードソン (Samuel Richardson) の見方である。リチャードソン説の出所は、常にスウィフトの敵であったジャック・テンプル (Jack Temple) なので、その真偽のほどは怪しい。

いずれが真実であったにせよ、やがてスウィフトは、ウィリアム・テンプルにとって缺かせない存在となる。そこでテンプルは既述のごとく、1692 年スウィフトをオックスフォードのハートホールに入らせ、M. A. の学位をとらせる。ところが、スウィフトが実際にハートホールにいたのは 1 ヶ月足らずだった。オルリーも、甥のディーン・スウィフトもオックスフォードの大学当局はトリニティ・カレッジの卒業証書に書いてある "Special gratiae" という文句に瞞着されたのだと述べている。しかも、これは 2 人の臆測ではなく、スウィフト自身が彼らに語ったのだという。オックスフォード大学には "Special gratiae" という制度はなかった。

こうしてオックスフォードからムア・バークに戻ったスウィフトは、1699 年ウィリアム・テンプルが死ぬまでテンプルの秘書を勧める。だが、その間の 1695 年 10 月から約 1 年は、アイルランドの北部キルルート (Kilroot) で僧職に就いている。

1694 年 5 月テンプルの庇護を離れて独立を願ったスウィフトは、テンプルの元を去ってアイルランドに向った。スウィフトを手元においておきたかったテンプルは、スウィフトの出立に腹を立てた。

生地アイルランドに戻ったスウィフトは、その変貌ぶりに途惑いを感じる。到るところで目にする顔が見覚えのない顔だった。とくに、司教の顔ぶれがガラリと変っていた。プロテスタントが勢威を増したダブリンと名誉革命以前のダブリンとでは大きな差があった。スウィフトに進んで援助の手を差し伸べようとする者はいなかった。已むなくスウィフトは不本意にも、テムプルに就職のための推薦状を依頼する。スウィフトの出発に腹を立ててはいたものの、テムプルが需めに応じて即座に推薦状を書いたのは、スウィフトの力量を高く評価していたからであろう。テムプルの力添えが効を奏して、スウィフトは、1694 年 10 月に助祭の位、翌年 1 月には司祭の位を、そして同年 10 月には、シーンで一時期テムプルの隣人であった高等法院判事キャペル (Capel) によって、アントリム郡 (County Antrim) キルルートの聖職禄をあたえられた。こうしてベルファースト湖の岸辺で、教区牧師としての生活が始まる。ところがスウィフトは数ヶ月でキルルートの生活に嫌気がさしてしまい、大家族を抱えて生活不如意の友人に聖職禄を譲ってイギリスに戻ってしまう。そして前述の通り、1699 年テムプルが死ぬまでテムプル家に滞在することになる。

ところで、キルルートの生活がなぜ嫌になったのか、自叙伝には誌されていない。デニス・ジョンストンはその主な理由として、スコットランド系アイルランド人の非国教徒がキルルートで優位にあったことを挙げている。これにはその土地の紳士階級の多くが含まれていたもので、国教会の牧師にとっては、押し黙ったカトリックの農民以上に厄介な存在となっていた。

他に、スウィフトがキルルートの聖職禄を捨ててイギリスへ戻った理由の一つに、スウィフトの婦女暴行未遂事件がある。1786 年のタトラー誌 (the Tatler) の 188 号に、スウィフトが近隣の百姓の娘を暴行しようとして果さなかったという記事が載った。出所は、キルルートでスウィフトの何代目かの後継者となった P 一師である。伝記作者のモンク・バークレイ (Monck Berkeley) もサー・ウォルター・スコット (Sir Walter Scott) もこの話を否定している。スコットはさらに P 一師はスウィフトが理事をし

ていた聖パトリック病院 (St. Patrick's Hospital) で狂人として死んだと付言している。このスキャンダルについてスウィフト自身によるなんらの釈明もないし、スウィフトの敵がこの1件を利用してスウィフトを攻撃することもしていない。また、スウィフトが数年後アイルランドに帰った時に、暴行未遂事件として裁判沙汰になることもなかった。この1件については、モンク・バークレイとスコットの否定説が有力なようである。

以上、スウィフトの自叙伝の問題点とその関連事項を取上げてきたが、その生年月日にしろ、三人称での記述にしろ、祖父トーマスの子息の数にしろ、スウィフトが初めてテンプル家を訪れたさいの当主テンプルの居住地や当時書生としてスウィフトがテンプル家に滞在した期間にしろ、事実を捏造している点が多い。

自叙伝とは、個人の一個の歴史である。学生時代に歴史と詩を好み、その後数篇の史論も公けにしているスウィフトは、一体どのような歴史観をもっていたのであろう。彼がものした歴史に関する論考で最大の力作と思われる『アン女王晩年4ケ年の治世』(The History of the Four Last Years of the Queen) 第一篇の劈頭で、スウィフトは次のように述べている。

私は、できるかぎり公平に調査した後に、真実もしくは真実と思えるものを厳密に追跡する… 私は、現代人を教導するばかりでなく、後代の人たちにも伝達する意図のある歴史に、賛辞や諷刺を混入するつもりはない。事実をありのままに述べれば、それが最上の賛辞になり、最も永続する非難にもなるからだ。<sup>(16)</sup>

歴史にたいして、このような見方をするスウィフトにしては、自叙伝の記述は、いかにも杜撰である。したがって、祖先の称揚もその価値が薄らぎ、ゴドウィンおじへの嫌悪の激しさにも納得しがたい後味の悪さを残す。スウィフトが自叙伝を完成せずに途中で筆を折ったのも、韜晦趣味からの捏造に自己嫌悪をきたしたためではないか。そんな疑念も湧いてく

る。

ここで、スウィフトとほぼ同時代の本格的な史家エドワード・ギボン (Edward Gibbon) の自叙伝を取り上げてみたい。筆者がギボンを持ち出したのは、一つには、さきに引用したスウィフトの言を俟つまでもなく、率直な事実の記述は、賞讃と非難に通ずるという意味で、歴史そのものの中に諷刺の因子がみられること、二つには、副業と専門の違いはあるにせよ、両人の歴史への深い関心である。

ギボンは、大著『ローマ帝国衰亡史』(The Decline and Fall of the Roman Empire) 発刊の翌年(1789年)52歳の時、自叙伝の筆を執り始めるが、ギボンの自叙伝には、単に自己の閱歴を語る以上の高邁な目的がある。ギボンは、『ローマ帝国衰亡史』全6巻を執筆した史家として、その大業を達成するまでの経緯を世界に披瀝する義務を感じていた。それは次の経過をみても明らかである。彼がこの大作執筆の着想をえたのは、1764年10月15日のことである。彼はこの日ローマの廃墟に独り坐して瞑黙していた。そのおり、たまたま裸足の修道士がジュピター神殿で捧げる晩祷の唱和を耳にしたのである。これがギボンにローマ帝国衰亡の跡を辿らせる機縁となった。この日から1787年擱筆するまでの23年間の刻苦の歩みを自叙伝全巻の略 $\frac{1}{3}$ の紙数を費して詳述している。

スウィフトも自叙伝を書いたのは1728年、60歳の頃とされているので、大作『ガリバー旅行記』上梓の後であるが、彼は自叙伝の中で、『ガリバー旅行記』には、いささかも触れていない。それに、スウィフトの場合、自叙伝を書く意図が明確でない。目的不明のまま筆を執るうちに、生来の韃晦趣味が頭を上げ、自身の史観との矛盾に耐えかねて、途中で挫折する結果になったのではないか。

ところで、スウィフトは詩人と歴史家を区別して次のように述べている。

詩人がどんな態度を装おうとも、彼らが不滅にするのは彼ら自身に外ならないことは明らかである。私たちが尊敬し賞讃するのはホー

マーであり、ヴァージルであって、アキレスやエイニアスではない。歴史家の場合は、これとは全く逆である。私たちの想いは、私たちが読んでいる行動や人間や出来事にとらわれてしまって、著者を顧みることとはほとんどない。<sup>(17)</sup>

してみると、ギボンの自叙伝では、ややもすれば薄れがちになる史家エドワード・ギボンの名を、あらためて世人に深く刻印することになったといえよう。

ここで興味深いのは、両人の代表作と自叙伝への読者の反応である。ギボンの自叙伝の編者 G. バークベック・ヒル (G. Birkbeck Hill) によると、『ローマ帝国衰亡史』の読者 1 人に対して、自叙伝の読者は少なくとも 20 人はいるという。スウィフトの場合は、これとは逆で、彼の断片的な自叙伝を読むのは研究者か一部の好事家で、多くの読者は『ガリバー旅行記』に目を向けるに違いない。18 世紀の 2 人の文人——諷刺家兼詩人と歴史家——の著作が、その代表作と自伝において、読者が全く対蹠的な反応を示しているのは大いに興味をそそられる点であろう。

#### 注

(1) Fragment of Autobiography

(2) The Family of the Swifts was ancient in Yorkshire.

*The Prose Workings of Jonathan Swift*, Vol. V, P.187

(3) He was born in Dublin on St Andrew's Day.

Ibid., P.192

(4) The rest of his Sons, as far as I can call to mind, were Mr Dryden Swift (called so after the name of his mother, who was a near relation to Mr Dryden the Poet), William, Adam, and Jonathan, who all lived and dyed in Ireland. But none of them left male issue except Jonathan, who besides a Daughter, left one Son, born seven Months after his father's death, of whose life I intend to write a few memorials.

Ibid., P. 191

(5) アンデレ (Andrew) は 11 使徒の 1 人でギリシャで殉教したといわれている。祝日 11 月 30 日。

## (6) the Triennial Act

3 年議会法 : 議会の期限を 3 年に限定する法律。1641 年発布され, 1716 年 7 年議会法の制定により廃止。

## (7) ... by the ill Treatment of his nearest Relations, he was so discouraged and sunk in his Spirits that he too much neglected his Academical Studies ; for some parts of which he had no great relish by Nature, and turned himself to reading History and Poetry.

Op. cit. , P. 192

## (8) ... although he had lived with great Regularity and due Observance of the Statutes, he was stopped of his Degree for Dulness and Insufficiency. Ibid. , P. 192.

## (9) 1692 年 11 月 29 日付書簡

The Correspondence of Jonathan Swift

Vol. 1. P. 12

## (10) I am ashamed to have been more obliged in a few weeks to strangers (at Oxford) than ever I was in seven years to Dublin College.

## (11) ゴドウィン・スウィフトの孫。

## (12) 1728 / 9 年 1 月 18 日付書簡

... When I went a lad to my mother, after the revolution, she brought me acquainted with a family where there was a daughter with whom I was acquainted. My prudent mother was afraid I should be in love with her ; but when I went to London, she married an inn keeper in Loughborow, in that county, by whom she had several children ... This woman (my mistress with a pox) left several children, who are all dead but one daughter, Ann by name ... I was at first determined to desire you would, from me, make her a present of five pounds ...

*The Correspondence of Jonathan Swift*, Vol. III. P. 309

文中の left については, 書簡集の編者 Harold Williams は次のような解釈をしている。

Notwithstanding the word 'left' a subsequent part of the letter shows that as far as Swift knew Betty Perkins was still alive.

## (13) ... Sr Wm Temple, whose Father had been a great Friend to the Family. Op. cit. , P. 193.

## (14) 1688 年の名誉革命後, 廃位させられたジェームズ二世を支持した一派。

## (15) For he happened before twenty years old, by a Surfeit of fruit to contract a giddyness and coldness of Stomach, that almost brought him to his Grave, and this disorder pursued him with Intermissions of two or three



years to the end of his Life. Upon this Occasion he returned to Ireld by advice of Physicians ... to recover his Health. But growing worse, he soon went back to Sr Wm Temple.

Op. cit . , P. 193.

- (16) ... I shall strictly follow Truth, or what reasonably appeared to me to be such, after the most impartial Inquiries I could make, ... Neither shall I mingle Panegyrick or Satire with an History intended to inform Posterity, as well as to instruct those of the present Age ... : Since Facts truly related are the best Applauses, or most lasting Reproaches.

*The Prose Writings of Jonathan Swift* , Vol. V II, PP. 1 ~ 2

- (17) Whatever the Poets pretend, it is plain they give Immortality to none but themselves : It is Homer and Virgil we reverence and admire, not Achilles or Æneas. With Historians it is quite the contrary ; our Thoughts are taken up with the Actions, Persons, and Events we read ; and we little regard the Authors.

Ibid. , Vol. 1, P. 242.

#### 参 考 文 献

Herbert Davis, ed. , *The Prose Writings of Jonathan Swift* (Basil Blackwell, Oxford, 1969)

Henry Craik, *The Life of Jonathan Swift*, Vol. II. (Burt Franklin, New York, 1969)

Denis Johnston, *In Search of Swift* (Hodges Figgis, Dublin, 1959)

Edward Gibbon, *Memoirs of My Life and Writings* (Methuen & Co. , London, 1900)

Harold Williams, ed. , *The Correspondence of Jonathan Swift* (The Clarendon Press, Oxford, 1972)